

## ブッカー賞受賞作品をめぐって (2)

加藤 弘和

まずブッカー賞の名称変更について触れておかなくてはならない。昨年度よりマン・ブッカー賞となり、この

を付記しておく。

名称での最初の受賞作品はヤン・マーテル (Yann Martel) の『パイの生涯』(Life of Pi) であった。詳しい経緯は省略するが、投資および証券ブローカー業務にかかわる世界的な企業、ザ・マン・グループが五年間の契約で新しいスポンサーとなったためであり、その結果賞金額も大幅に増額になった。ますます各出版社間の競争が激しくなることだろう。

今回は一九八一年から一九九〇年までの受賞作品を取り上げることにする。まずこの期間の受賞作者および作品名を列挙すると、次のとおりである。なお、参考のために作者名のあとに生年および出身国あるいは出生地

1981 Salman Rushdie (1947-・ボンベイ)

*Midnight's Children*

1982 Thomas Kenally (1935-・シカゴ)

*Schindler's Ark*

1983 J. M. Coetzee (1940-・南アフリカ)

*Life and Times of Michael K*

1984 Anita Brookner (1928-・ロンドン)

*Hotel du Lac*

1985 Keri Hulme (1947-・ニュージーランド)

*The Bone People*

1986 Kingsley Amis (1922-1995・ロンドン)

*The Old Devils*

1987 Penelope Lively (1933 - ・カイロ)

*Moon Tiger*

1988 Peter Carey (1943 - ・ヴィクトリア)

*Oscar and Lucinda*

1989 Kazuo Ishiguro (1954 - ・長崎)

*The Remains of the Day*

1990 A. S. Byatt (1936 - ・シェフィールド)

*Possession*

一九九一年から二〇〇〇年までの受賞作品を取り上げた前回、この期間の特色として、(1)受賞作家の国籍が多様であり、それぞれの国ないし土地の特色が色濃く出ていること、(2)西欧とアジアあるいはアフリカとの接触の歴史が、一つの大きな主題になっていること、(3)第一次および第二次世界大戦の両方、あるいは、いずれかを題材としている作品が多いことに注目した。十一作品（一九九二年は二作品が受賞）中八作品までが、二十世紀に何らかの形で決着をつけ、将来への展望を模索しようと

しているのではないかと書いた。また、(4)同時代の社会および、それに特有の諸問題をテーマとしている作品が少ないことは意外であった。今回の期間についてはどのような特色が見られるのか、前回取り上げた期間と大きな違いが見られるのだろうか。

今回も受賞作者の出身国あるいは出生地、ならびに、それに伴う作品世界の多様さが関心を引く。これがブッカー賞最大の魅力の一つであろう。受賞時の作者の年齢も、三十代から六十代（三十、四十、五十代各三人、六十代一人）と幅広い。処女作と呼んでよい作品で授賞する作家がいることも、ブッカー賞が注目される大きな要因のひとつであろう。日本でもブッカー賞受賞作品は注目されてきており、たとえば今回取り扱う十年間について言えば、翻訳されていないのは、ケリー・ヒュームとキングズリー・エイミスの作品のみである。十人の受賞作家の中には、ほかの作品でブッカー賞の最終選考に残ったり、他の文学賞を受賞したりしているものも多い。以下において、受賞作家の経歴と受賞作品の概略をごく簡単に書きとめておく。本稿はあくまでも研究ノートに

過ぎないことを、改めてお断りしておきたい。

ラシユディはボンベイで生まれた。イスラム教徒の中間階級の出身である。十四歳のときにイギリスの有名なパブリック・スクールの一つであるラグビー校に入学し、のちにケンブリッジ大学で歴史を専攻した。父親もケンブリッジで学んだ実業家であり、祖父は詩人であった。両親は一九六四年にパキスタンのカラチに引越した。

『真夜中の子供たち』は祖父の代から三代にわたる一族の物語である。主人公は、ラシユディと同じ一九四七年生まれの男である。この年の八月十四日、午前零時を期して、インドはイギリスから独立した。タイトルはこのときのネール首相の演説からとられている。この真夜中に生まれた子供たち千人がのちに同盟をつくる。主人公はちょうど真夜中に生まれた。千人の子供たちはそれぞれ超能力的・魔術的な力を備えている。真夜中に近いときに生まれた子供ほど、そうした能力が強い。主人公は、じつは乳母によって産院の隣で生まれた子と取り替えられた子なのだが、十代半ばまで本人は勿論、両親もそれ

を知らないまま育てられる。非常に大きな鼻——子孫繁栄のシンボル——の持ち主であり、また、多くの人の声・言葉を聞き取り、まわりの人の心理を読む優れた能力を授かっている。この男がその後のインドの歴史的事件、つまり、カシミールをめぐるパキスタンとインドの対立、中印戦争などを経験しながら、どのように育ち、成長し、生きたかが、現在三十一歳になり死の床にある主人公自身によって語られていく。主人公が歴史に翻弄され、波乱に富んだ人生を振り返るという形式で書かれている。ハイデルベルクで勉強した医者である祖父についての話から始まる。社会のさまざまな階層・職業の人が登場する。奇想天外な、幻想的な、悲惨な、グロテスクな、あるいは喜劇的なさまざまな要素をはらむ五百ページを超える大作であり、国家・民族・文化・人間の諸相が、圧倒的な迫力を持って描かれていく。一九八八年の作品『悪魔の詩』が、当時イランの精神的指導者だったホメイニの逆鱗に触れ、「ラシユディを暗殺せよ、抹殺せよ」との命令が下ったが、『真夜中の子供たち』もインドを侮辱したということ、批判にさらされた。逆に言えば、それ

だけの内容を持った作品といえるであろう。一九九三年にはブッカー賞創設二十五周年記念に、この作品がそれまでの受賞作品のなかの最高傑作として選ばれてもいる。

キニーリーの作品『シンドラーの方舟』は、スピルバーグの映画『シンドラーズ・リスト』の基になった作品であることは言うまでもない。短い章を次々に継ぎ足していく、まるで映画の一コマ一コマを繋いでいくような構成になっている作品である。小説というよりも、ジャーナリスティックなノン・フィクションだという批判もあったようだ。しかし、彼はこれ以前の作品が三回もブッカー賞の最終選考に残っているほどの実力者である。オーストラリアを代表するかなり多作な作家である。内容については特に触れるまでもない。キニーリーはシドニーで生まれ、今もそこで暮らしている。すぐに諦めはしたが、若いころカトリックの司祭を志したそう。付言すれば、ブッカー賞受賞作のかなり多くが、映画化されている。今回取り扱っている十作品の中でも、『オスカーとルシンダ』、『日の名残り』が映画化されており、

前者で主役を演じたラルフ・ファイニングは『シンドラーズ・リスト』にも出演しているし、マイケル・オンダーチェが一九九二年に受賞した『イギリス人の患者』でも主役を演じている。一九九〇年に受賞したバイアットの作品も最近映画化され、日本でも今年はじめに『抱擁』というタイトルで公開された。

クッツェー（ブッカー賞受賞作品をめぐって（一））では、迷いながらコエトジーと表記したが、間違いだった）は、一九九九年にも『恥辱』で二度目の受賞をしている。『マイケルKの生涯と時代』（邦訳タイトルは『マイケルK』）は短い作品であり、舞台は南アフリカだが、登場人物の人種も、過去の話なのか未来の話なのかも、おそらく当局の検閲を恐れていることだろうが、推測できるとはいえ曖昧である。政府軍と反乱軍との闘争がつづいている状況の中で、主人公マイケルKがどのように生きてきたかに焦点が当てられている。彼は極貧の家庭の生まれであり、しかも未熟児であり三つ口であって、施設に入れられ庭師に育つ。雑役婦ないし家政婦をしている母

異なる趣の作品である。

親が病気になる、故郷に帰りたいと言ひ出す。そこで汽車に乗るための許可証をもらおうとするがなかなかおりにくく、途方にくれ、仕方なく主人公は自転車を改良して荷車にし、木の枠をつけ、母親をそれに乗せて出発する。だが母親は途中で死んでしまい、彼は浮浪者仲間に入ったりしながら、一人で母親の故郷を訪ねるが、そこも荒廃している。彼は山に入り、そこで野菜を作ったりして生きていく。ところが、政府軍に反乱軍の一人ではないかと疑われて逮捕され、施設に入れられる。素朴に自由に生きたいと思ひながら、そうは生きられない。最後の場面、つまり、短い第三部は内乱が終わった後なのだろうが、かつて母が住んでいた海辺の都会に戻り、浮浪者生活を送っている。しかし、未来への希望は感じられないように思う。

クッツェーは二〇〇三年度ノーベル文学賞を受賞したとごく最近報じられた。

以上の三作品は、戦争や内乱の影響をまともに受けた人々の生涯・生活が描かれている。一九八四年の受賞作『秋のホテル』（邦訳タイトル）は、これらとはまったく

今回の十年間についてみても、一番若い人は三十歳代で受賞している。アニータ・ブルックナは一九二八年生まれであり、受賞したのが遅かったことになる。彼女はイギリスばかりでなく日本でも人気があるようで、好んで彼女の作品を翻訳している人もいる。受賞作品の主人公は女性作家である。ロマンティックな作品を書くのが夢である。彼女はよいよ結婚すると決めて、結婚式の当日を迎える。ところが、結婚式の会場まで車で出かけながら、そこを通り過ぎてしまう。せっかくいい結婚話なのに破談にした、といって腹を立てた友人たちに、「海外に行つて頭を冷やしてこい」ということで、なかば強制的にスイスのホテルに追いやられてしまう。この小さなホテルで、金持ちの母娘、夫から離れて一人で泊まっている女など何人かの滞在客と交わる。そこで最後にある男に言い寄られて結婚を決意する。ところが彼は母娘の娘と結婚することになり、主人公は振られてしまう。彼女は作家であり、いろいろの場面やひとの心理などを

想像したりするが、結局自身の想像が当たらないことを嘆く結果になる。

この十年の受賞者のなかで女性は、ブルックナ、ヒューム、ライヴリイ、バイアットの四人である。ヒュームを除き、ほかの三人は作品のなかでフェミニズムに言及している。ブルックナはそれにあまり共感できない、という立場をとっている。少なくとも主人公は、共感しておらず、ある意味では男性なしでは生きられないタイプの女の子のような印象を受ける。ホテルをあとにするときに、かねてより付き合っており、スイスに来てからも連絡を絶やさなかった妻子のある男に手紙を書いている。ライヴリイとバイアットのフェミニズム観についてはあとで触れることになる。

ケリー・ヒュームの受賞作のタイトル、『ザ・ボーン・ピープル』とは、どういう意味なのか。

ヒュームはニュージーランドのクライストチャーチで生まれ、カンタベリー大学で学び、ニュージーランド南島の西海岸で暮らしている。詩や評論も書き、画家でも

ある。受賞作の主人公は日本で空手を学び、かなり腕に自信があり、画家であつて日本画の話もでてる。ヒューム自身が日本に滞在したことがあるのではないかと想像する。彼女はマオリ族の血と同時に、スコットランド北方のオークニー諸島およびイングランドの血も引いている。この作品ではマオリ語がたくさん使われており、著者自身が巻末でそれらについて説明を加えている。タイトルを「人々の骨」と考えると、この場合には「骨」は、祖先あるいはその関係を意味するそうである。ところが、マオリ語には「骨の人々」という表現があり、これから何かを始める人間ないし新しい人間という意味だそうだが、つて、このタイトルは過去との繋がり、あるいは、祖先との繋がりを考えると同時に、これから新しい世界を築いていこうと模索する主人公を象徴しているように思われる。

主要な人物が三人登場する。その要となるのが二十歳の女性である。彼女はかなり裕福な家庭の子であるようだ、今は彼らと絶縁し、人里離れた寂しい海岸に、塔がある大きな家を自分で建てて一人で暮らしている。

きわめて自意識が強く、なぜ自分は生きているのかとたえず必死に問いかけている。マオリ族と西欧の血が流れている自分というものを強く意識している。ある日海岸を散歩して帰ると、見知らぬ男の子が塔に入り込んでいる。この子は口がきけない。何年前か前、激しい嵐の夕方に近くで一隻の船が難破し、それに乗っていたアイルランドの伯爵の子孫と推定される男をはじめ、数は不明だが大人たちは全員死ぬが、男の子一人だけが助かる。彼

を助けた男が今彼の面倒を見ている。彼は工場労働者である。夫婦で彼を育てることになるが、その後まもなく妻と生まれたばかりの子供が死んでしまう。男は救助した子を愛しているが、きちんと育てようという意識が強すぎるあまりか、ときに暴力を振るう。最終的には子供に暴力を振るったことで、この男は刑務所に入れられることになる。それまでに男の子は、主人公である女性になつき、しばしば塔を訪れるようになり、三人で暮らせるときを夢見るようになっていた。だが男にひどい虐待を受けたため入院し、三人がばらばらになる。塔を出た女主人公も、出所した男も各地をさまざまい歩き、入院した

男の子も含めて三人がそれぞれ死地をさまようことになる。男の子にはおそらくアイルランド人の血が流れており、女主人公も複雑な血を引いており、これら二人と土着の男の三者がどのように融和して生きていけるかを、個人的なレヴェルをこえて作者は追求しているように思われる。マオリ族の神話や伝説、さらにその精神性が濃い影を投げかけている。

この作品は、大きな出版社は出版を引き受けてくれず、小さなフェミニスト系の出版社によって刊行され、好評を博した。翻訳されていないのは残念である。小説としては、ヒュームの処女作である。

一九八六年のエイミスの受賞作は、ウェールズが舞台である。長い間イングランドで活躍し第三級勲功章（CBE）を受勲した詩人アランが、老後を過ごすために故郷であるウェールズに夫婦ともども帰ってくる。そこで二人に共通の友人である三組ほどの夫婦——その中にはアラン夫妻それぞれのかつての恋人たちもいるが——と再会し、男たちはパブでビールを飲み、女たちは

友人宅でワインを飲みながら、おもに回想にふける。とくに非日常的な大きな出来事もなく、主人公はある親しい仲間内のパーティの席で急死する。ウェールズ人気質がしばしば話題になるが、深く追求されることはない。かつて親しく付き合った男女の再会の様子も描かれているが、四百ページに及ぶ作品全体としての意図がどこにあるのか疑問に思わざるをえない。エイミスが一九五〇年代に「怒れる若者たち」の一人として登場し活躍したころを思い浮かべながらこの作品を読むと、期待を裏切られたという思いが強い。受賞当時エイミスは六十歳代半ばであつた。彼はその風刺的な作品によつてよく知られているのだが。受賞作そのものからも、かつてはそれなりに活躍しながら、今は第一線から退いた人々のペーソスが伝わってくる。

ペネロピ・ライヴリーはカイロで生まれ、そこで子供時代を過ごした。とはいえ、彼女も十二歳のときにイギリスに渡り、のちにオックスフォード大学で現代史を専攻している。

主人公は著書もある歴史家であり、彼女の父親は第一次大戦で戦死し、ほかに身近なひとを兩大戦で失っている。彼女自身は第二次大戦中に従軍記者としてエジプトで取材にあたっている。戦後はソ連、ハンガリー、ラオス、キューバ、ヴェトナムの状況にコミットしていく。しばらく結婚生活を送つたことのある男の父親をとおして、ロシアは歴史上もつとも苦しみの多い国と考えるようになる。彼女は自我ないし自意識がきわめて強い。兄と大の仲良しであり、彼は戦時中は国の情報機関に属し、戦後はオックスフォード大学で教えたり国際会議で活躍したりするが、五年前に亡くなつた。彼ら二人は、最前線に立つ人間という自負を持つている。彼女はフェミニズムに触れて次のように言っている。自分が若かつたときにそうした運動があれば、当然それに同調したであろうが、それが私を必要としたからであつて、自分はその必要を感じなかつたと。今は癌を患つて病床にあり、自分が生きた時代、生涯を回想するという形式の作品である。世界の歴史を書くのだという意気込みで、『クロード・ディア・ハンプトン（主人公自身を指す）の生涯と時代』



を執筆している。主人公は、自分は多くのクローディアから成り立っている、連続性はない、すべては同時に起きる、と言う。一人称と三人称による記述があり、ほかの登場人物の意識や考えも書きとめられている。たとえば、「母は私のことを知らない」などと、娘の視点からも語られる。タイトルの「ムーン・タイガー」とは、作品中で説明されているように、蚊遣りのことである。

ピーター・ケアリイはウィクトリアで生まれ、のちにメルボルンからロンドン、さらにシドニーに移り、最後はニューヨークに落ち着き、ニューヨーク大学の創作科で教鞭をとっている。

『オスカーとルシンダ』のオスカーは、イングランド南西部の州デヴォンの寂しい海辺で博物学者の父親とふたりで暮らしていたが、父親の信仰に疑問を感じて英国国教会の牧師の教会に身を寄せ、のちにオックスフォード大学で神学を学ぶことになる。牧師がたまたまオックスフォードの出身であり、彼に勧められてのことだった。ルシンダはオーストラリアの生まれであり、両親にあい

ついで死なれ、その財産を相続してガラス工場を買収し経営している。大学を卒業し、たまたまオーストラリアに牧師として赴任することになったオスカーと、イギリスにガラスの製造技術を学びに来ていて帰国することになったルシンダとが、同じ船に乗り合わせ親密になる。二人は同年齢である。オスカーは、ルシンダが相談相手になつてもらっていたが、まともな教会もない僻地に追いやられた牧師をいまだに愛していると思ひ込み、彼女の工場でガラスの教会を作り、それを彼に贈つてはどうかと提案し、彼がそれを運ぶ役を引き受ける。

オスカーは大学時代にただ一人彼と付き合つてくれた遊び人の友人から賭け事を教えてもらい、最初から運がついてすっかり夢中になる。とは言え、もうけた金は、彼にオックスフォード進学を勧めてくれた故郷の牧師の貧しい教会につき込み、自分のためには使わない。純真で善意に満ちた善良な男である。一方、ルシンダも社交の集いで賭け事の魅力に取り付かれるようになっていた。賭けがもとで教会を追放されたオスカーは、ルシンダの工場で働くことになる。二人はガラスの教会を作り送り

届けることに全財産——とはいえオスカーは命——を賭ける。彼は道中、まだ未開の地域で危険に遭遇しながらも、教会を送り届けることに成功するが、川岸につながられていた教会の中でいつの間にか眠ってしまい、水没する教会とともに死ぬ。二人の関係を通じて、イギリスとオーストラリアとの関係が歴史的に考察されている。オスカーは一八四一年生まれであり、事故死したのは六六年のことだった。彼の曾孫が、祖先の話をするという形式の作品である。ただし、曾孫というのはルシンダとのあいだの末裔ではない。

ケアリーは、二〇〇一年に、『ケリー・ギヤング その真実の記録』で再度ブッカー賞を受賞している。これまでのところ二度受賞しているのは、クッツェーについて二人目である。

カズオ・イシグロの『日の名残り』という日本語のタイトルから、読者はどのようなイメージを抱くのだろうか。原題では *"day"* と *"the"* がついている。*"the day"* には最盛期ないし全盛期という意味があるし、ある特定

の日を指しているとも考えられるのではないだろうか。

第一次大戦後、連合国側はドイツに対して過酷な制裁を加え、ドイツ人は悲惨な状況に追いやられる。一九二〇年代はじめ、主人公であるステイヴンが執事として仕えていたダーリントン卿は、これではいけない、ドイツ人を救おうではないか、戦争は終わったのだ、いつまでも憎んでいてはだめだと考え、自宅に英・米・独・仏で影響力を持つ人物を招待して一種の国際会議を開く。晩餐会をやっている最中に、かつては名前を知られた執事だったが当時ステイヴンの指揮下で働いていた父親がそこで亡くなる。さらに、一九三〇年代になってナチが台頭してくると、ダーリントンはそれに共鳴していく。彼の呼びかけに応じてイギリスの首相と外相がナチの大物と会談し、ナチと交渉しようとする。これら二つの会議を開いたところが主人の、したがって執事のステイヴンにとつての全盛期であったと言えるであろう。ダーリントンは後に、反ユダヤ主義者でナチに特別扱いされたと批判されることになる。一九三〇年代は政治の時代であり、共産主義を信奉するものがいた一方、ナチに共鳴

するイギリス人もいた。第一次、第二次大戦を直接描くのではなく、執事の目を通じて当時のイギリス政治の重要な一面をなげなく取り上げている。この会談の夜、女中頭でありステイーヴンに好意を寄せていたケントンが、ほかの男と結婚することを決意したと泣きながら話す。ステイーヴンにとって個人的にはこの夜が、父親の亡くなった夜とともにタイトルの「the day」に当たるのではないだろうか。

イシグロは一九五四年に長崎で生まれ、一九六〇年に両親とともにイギリスに行き、そのまま腰をすえることになった。作品の時期は一九五六年七月に設定されているが、その年は、エジプトのナセル大統領が運河の国有化を宣言したことで、いわゆるスエズ危機が起こった年であり、それがこの作品の背景にあると考えられている。その三年前に主人が亡くなり、今はアメリカ人が新しい雇い主である。しばらく帰国するから、その間自分の車を使って旅行でもしてきたらどうかと言われて、執事は思い切って旅に出る。スタッフ不足を解消するために、かつて女中頭をしていたミス・ケントンに会いに行こう

と考える。たまたま彼女から過去を懐かしむ手紙をもらっていたのだ。一週間にわたる旅の記録に過去の記憶を交えて作品は進行する。

イシグロの作品については、もう一点触れておきたいことがある。旅に出た最初の日にイングリランドのすばらしい風景に接して、「偉大さ」「威厳・高貴・尊厳」について考える。

のちに人間の尊厳について考える契機に、それはなっている。間違いを犯したにしても、ダーリントンは尊厳を失いはしなかった。しかし、新しいアメリカ人の主人の下ではもつと冗談を解せる人間にならなくてはならない、とステイーヴンは考えもする。イシグロは、会議参加者の議論を通じて欧米各国の比較論を展開している。さらに、『日の名残り』以前のイシグロの二作品を思い起こすとき、第二次大戦中およびその後の日本および日本人を念頭においていると考えざるをえない。

バイアットの受賞作のタイトル「possession」は、なんと訳したらよいのだろうか（邦訳タイトルは『抱擁』）。

主人公は二十歳代で博士号をとった文学研究者である。十九世紀のあるイギリス詩人について研究している。一冊の本を調べているときに、この詩人が、同じく詩人である女性にあてて書いた手紙の下書きを二通見つける。これに触発されて、二人の関係を調べていくうちに彼らが深い関係にあったことがわかってくる。大家と若手の研究者、さらに英米の研究者の間での熾烈な競争が、どたばた喜劇的に描かれることもあるが、まるで文学の研究書あるいは詩人の伝記を読んでいるような作品である。主人公は、二人の関係をヨークシャーやフランスにまで出かけて調べているうちに、女詩人の遠縁に当たる女性研究者の協力を得るようになり、彼女に魅せられてもいく。従って、主人公は研究対象と同時に現実の女性に魅せられ、取り付かれていくことになる。タイトルはこうした主人公の心理状態を象徴しているのではないだろうか。つまり、あまり適切とはいえないが、「憑依」あるいは「魅せられて」といった意味で使われていると思われる。

バイアットはフェミニズムについて次のように言っ

いる。「私はもちろんフェミニストです。しかし、フェミニスト運動のために書くよう頼まれるのはいやですし、頼まれそうだと思うと不安を覚えます。しかし……生来政治的であるには多少歳をとりすぎています。」小説家のマーガレット・ドラブルとは姉妹である。ドラブルもブッカー賞を受賞するのではないだろうか。バイアットはケンブリッジ大学で学士号をとり、その後プリン・モークレッジとオックスフォード大学大学院で学んでいる。

本稿は、昨年（平成十四年）八月八日に市民大学体験講座でおこなった講演「英国の文学 ブッカー賞受賞作品をめぐる——カズオ・イシグロを中心に」に手を加えたものであることをお断りしておきたい。